

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 看護学部 看護学科

講師 佐野宏一郎

2023年8月作成

1. 教育の責任

日本では少子高齢化が進展し多死社会を迎えたため、厚生労働省は、2025年までに看護職員を50万人増加させる改革を打ち出している。そのため、看護師の質の向上に加えて、看護師の量の確保が必要となってくる。山梨県においては令和4年に高齢化率が31.2%まで上昇し、今後も全国よりも高齢化が進展することが予測されている。山梨県内における唯一の私立大学看護学部として山梨県内で長く活躍することができる看護師・保健師を育てていくことが望まれる。

大学全入時代を迎え、本学部の学生の基礎学力は決して芳しくない状況にある。このような学生を国家試験を合格できるレベルに学力を引き上げるだけでなく、卒業後に継続して仕事に従事していくことができる人材を育てるためには、継続して学習する力や問題を発見し解決する力、社会で必要とされる能力の基盤を大学の教区の中で育てていく必要性があると考えている。

私は看護学部の老年看護領域の教員として、老年看護領域の科目を担当している。2023年度は、老年看護学概論、老年看護援助論Ⅱ、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱの科目を担当した。

2. 教育の理念・目的

一般社団法人日本看護系大学協議会による、看護師学士家庭教育におけるコアコンピテンシーでは、看護大学の卒業時到達目標として、対象となる人を全人的に捉える基本能力、ヒューマンケアの基本に関する実践能力、根拠に基づき看護を計画的に実践する能力、特定の健康課題に対応する実践能力、多様なケア環境とチーム体制に関する実践能力、専門職として研鑽し続ける基本能力、等が定められている。これらを基として、基本的な看護実践能力を習得したうえで、臨床における判断・実践能力を育てていくことを重点において教育を行っている。

1) 対象を全人的に捉えることができるアセスメント能力を向上する

老年看護領域で看護の対象となる高齢者は、基本的に加齢や高齢者に特徴的な疾患を持つなど、高齢者特有の様々な特徴を有しており、これらの基本的な知識を習得することは非常に重要である。高齢者の身体的特性を理解したうえで、それらを的確に把握するアセスメント能力を養成することが望まれる。一方で、看護の対象となる高齢者は多様性をもつ存在でもあり、様々な人生の経験、価値観、社会性などに触れ、対象に関心を寄せ理解するよう努めるとともに、その人を尊重して関わる事が出来る人材を育てることは極めて重要である。このような全人的に対象をとらえるためにはどのような視点が必要なのか、ICFなどの視点を活用し教授している。

2) 老年看護における、対象者の生活を支える看護実践能力を高める

嚥下機能の低下、運動機能の低下、排泄機能の低下など、病院や施設に入所している高齢者には、疾病上の問題だけでなく、生活上の問題が多く生じる。看護の役割機能でもある療養上の世話における専門的な知識・技術を習得することは極めて重要である。このような看護の技術は授業の演習だけで習得することは難しいため、実習等における実践を通して学ぶことが重要である。大学の中で学んだことと実習で実践したことを関連付けていくことが出来るよう教授している。

3. 教育の方法

教育の機会については、大学における講義演習と臨床実習を関連付けて展開していくことが重要である。

授業の内容が実習および将来の臨床での実践にどのように関係するのかを学生が意識できるように伝えていくことを重要視している。

・臨床実践に即した実践的授業

高齢者の生活援助技術について体験をもとに学んでいけるよう指導している。例えば、移動・移乗について高齢者体験装具を装着し、高齢者の身体状況について実体験をもとに理解するとともに、その状況でどのように介助を受ければより安全に、安楽に動作をすることが出来るのかを考える。少しの工夫で動きやすさが異なってくるため、このような体験を通して実際の援助の方法について考える。またこのような演習を通して、実際の現場における援助についてグループで検討し、問題解決できる力を養っていけるよう指導している。

・チームスを利用した授業の工夫

Microsoft Teams を用いて、授業中に学生に問題を出しその場で回答を集計。回答の概要を提示してフィードバックするなど、遠隔授業の中でも双方向のやり取りができるよう工夫している。また、記録・レポート等の課題を Microsoft Teams で提出することで、学生へのフィードバックが円滑になる。

4. 教育の成果・評価

授業評価アンケートを活用して授業内の反省点を振り返っている。ただ、2022年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で臨床実習が行なえず本来の実習形態と大きく異なっているため、実習に関しては評価が難しい状況である。

・老年看護学概論については、2022年度は2021年度と比較し内容理解の項目で点数が低下していた。教授内容は同様であったが、授業形式が対面からオンラインに変更となったことが影響している可能性がある。オンライン授業の特性として、受講している学生の顔が見えず状況の把握が難しいことが挙げられるが、オンライン授業を行う際には通常授業よりも多くの工夫が必要になると考えられる。ただ、当該科目の教授内容にはやや難解な内容も含まれるため、1年生の段階で講義を実施するにあたっては対面形式での授業を前提に計画を立てるべきであるとも考える。

・老年看護援助論Ⅱについては、本来グループワーク形式で実施していた事例演習を2019年から新型コロナの影響の影響で個人学習に転換して3年が経過した。グループワークの際には、学生によって作業量に偏りが生じ不公平感があるなどの問題があったが、個人作業になってからこのような問題は見られなくなった。一方で、グループワークが行われないうことにより、課題における理解度が低下する懸念が生じたが、これについては授業時間内で事例に対する検討およびフィードバックを時間をとって行う事で補ったことで、学生の理解度は高かった。老年看護援助論Ⅱは本年度で授業が終了し、新カリキュラムに移行する予定。

5. 今後の目標

今後の目標としては、新カリキュラムに移行するにあたり、よりチーム医療や多職種連携などを意識した授業や実習を構築していくことが必要と考えている。チーム医療については、3年生の実習において多職種連携を重視して考える必要がある成人老年看護学実習3があり、この実習に向けてどのような授業計画を策定するのが大きな課題である。

授業の中で問題解決型の授業を取り入れるなど、学生が自ら学び考える授業の形式を取り入れていくことが必要と考えている。